

MINGEI: The Beauty of Everyday Things

2024 10/5 - 12/22 sat. sun.

美は暮らしの
なかにある

民藝

プレスリリース

MINGEI

名古屋市美術館
Nagoya City Art Museum



芸術と科学の杜

〔上から〕 緑黒釉掛分皿 因幡牛ノ戸(鳥取) 1931 年頃 / 流描皿 河井寛次郎 京都 1927-28 年頃 /
藍鉄絵紅茶器 濱田庄司 栃木 1935 年頃 / 食器棚 イギリス 19 世紀
いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa

展覧会概要

展覧会名	民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある MINGEI: The Beauty of Everyday Things
会期	2024年10月5日(土)–12月22日(日)
会場	名古屋市美術館 〒460-0008 名古屋市中区栄2-17-25〔芸術と科学の杜・白川公園内〕
開館時間	9:30–17:00、金曜日は20:00まで(入場は閉館の30分前まで)
休館日	月曜日(ただし、10月14日〔月・祝〕、11月4日〔月・休〕は開館)、 10月15日〔火〕、11月5日〔火〕
料金	一般1,700円(1,500円)／高校・大学生1,000円(800円)／中学生以下無料 宮入圭太アートサコッシュセットチケット3,200円(数量限定、チケットぴあのみ取扱い) ※()内は、前売りまたは20名以上の団体料金 ※いずれも税込
主催	名古屋市教育委員会・名古屋市美術館、メ〜テレ、東映
後援	名古屋市立小中学校PTA協議会
特別協力	日本民藝館
協力	静岡市立芹沢銈介美術館、カトーレック、名古屋市交通局
監修	森谷美保(美術史家)
監修協力	濱田琢司(関西学院大学文学部 教授)

●会期中、講演会・ワークショップなど関連イベントを開催します。詳細は展覧会ホームページ、名古屋市美術館ホームページをご覧ください。

巡回情報 本展覧会は名古屋市美術館に続いて、福岡に巡回予定です。

企画趣旨

約100年前に思想家・柳宗悦が説いた民衆的工藝、「民藝」。日々の生活のなかにある美を慈しみ、素材や作り手に思いを寄せる、この「民藝」のコンセプトはいま改めて必要とされ、私たちの暮らしに身近なものとなりつつあります。本展では、民藝について「衣・食・住」をテーマにひも解き、暮らしで用いられてきた美しい民藝の品々約150件を展示します。また、いまに続く民藝の産地を訪ね、そこで働く作り手と、受け継がれている手仕事も紹介します。

さらには、2022年夏までセレクトショップBEAMSのディレクターとして長く活躍し、現在の民藝ブームに大きな役割を果たしてきたテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Art ディレクター)による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションも見どころのひとつとなるでしょう。

柳が説いた生活のなかの美、民藝とは何か——そのひろがりや今、そしてこれからを展望する展覧会です。



結び文座布団 芹沢銈介 静岡
1930年頃 個人蔵

みどころ

1 細やかな手仕事が生み出した刺し子の着物や、素朴な味わいにあふれる器など民藝の名品、約150件が集結

国内のみならず世界各地に目を向け、名も無き作り手たちが生み出す日用品にこそ「美」が宿る、と見出した柳宗悦の眼。本展では、柳らが集めた暮らしのなかにある美しい民藝の品々を中心に紹介し、「民藝ってなんだろう?」という初心者の方々にも親しみやすくご覧いただきます。文様の美しさだけでなく機能性も兼ね備えた江戸時代の刺し子の着物や、大胆な模様が印象的なアイヌの衣装、愛らしいイギリスのスリッパウェアの皿、フォルムの美しい芯切挟や手箒といった、日本民藝館(東京・目黒)や静岡市立芹沢銈介美術館などの所蔵する、時代や地域も様々な名品が並びます。

2 民藝の「いま、そしてこれから」に迫る展覧会

柳の亡きあとも、民藝運動はひろがりを見せました。また、日本の各地でも伝統を受け継ぎ、現在でも新たな職人や手仕事の品が誕生しています。本展では、現在の民藝の作り手に注目し、小鹿田焼(大分)、丹波布(兵庫)、鳥越竹細工(岩手)、八尾和紙(富山)、倉敷ガラス(岡山)の5つの産地を紹介。現代作の展示とともに、現地を取材して制作した本展オリジナルの映像により、そこで働く人々の想いや制作風景を伝えます。

また、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス/北村恵子(MOGI Folk Artディレクター)によるインテリアの実例を、現代の生活に溶け込む「これからの民藝スタイル」としてインсталレーション展示します。

つくる人、つなぐ人、つかう人のコミュニケーションで続いていく、これからの民藝にも視点をひろげます。

3 展覧会特設ショップもお楽しみに

本展覧会の特設ショップでは、第III章で紹介する東京・高円寺のショップMOGI Folk Artが日本各地の作り手たちと交流して生み出した別注品の数々や、注目の染色家/アーティスト・宮入圭太氏が本展のためにデザインしたグッズ、そして各地のやきものやガラス、布、和紙、木工など、国内外の職人による民藝の品々を多数取り揃えます。

暮らしのなかに取り入れたい、民藝ならではの自然の素材や、人の手のぬくもりに、特設ショップでも出会うことができます。どうぞご期待ください。

柳宗悦と民藝運動

「民藝運動の父」と呼ばれる思想家・柳宗悦(1889-1961)。東京、麻布生まれ。1910年、雑誌『白樺』の創刊に参加。宗教哲学や西洋美術などに深い関心を持ち、1913年に東京帝国大学哲学科を卒業。その後、朝鮮陶磁、木喰仏の調査研究、収集を進めるなか、無名の職人が作る民衆の日用雑器の美に関心を抱いた。1925年には、その価値を人々に紹介しようと「民藝」という新語を作り、濱田庄司や河井寛次郎ら共鳴する仲間たちと民藝運動を創始する。1936年、日本民藝館を開館し、初代館長に就任。以後ここを拠点に、国内外各地への調査収集の旅、文筆活動や展覧会活動と、活発な運動を展開した。

[左から]
角酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1979年/
酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1985年頃/
栓付瓶 メキシコ 20世紀中頃
いずれも日本民藝館蔵

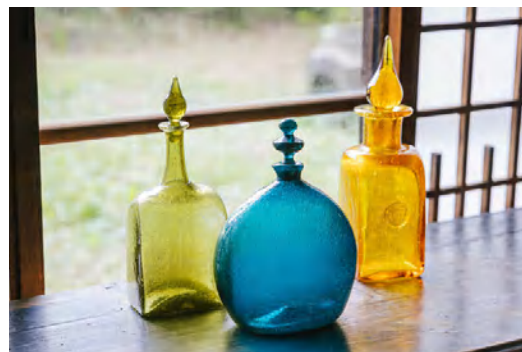


Photo: Yuki Ogawa

第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから



日本民藝館「生活展」会場写真 1941年

第Ⅰ章

1941生活展——柳宗悦によるライフスタイル提案

1941(昭和16)年、柳宗悦は自身が設立した日本民藝館(東京・目黒)で「生活展」を展開。民藝の品々で室内を装飾し、いまでいうテーブルコーディネートを表示しました。暮らしのなかで民藝を活かす手法を提示した、モデルルームのような展示は当時珍しく、画期的でした。

第Ⅰ章では「生活展」の再現を試み、実際に出品された作品を中心に、柳が説いた暮らしの美を紹介します。



藍鉄絵紅茶器

濱田庄司 栃木 1935年頃 日本民藝館蔵

笹の葉の文様が描かれた濱田庄司の紅茶器セットは、柳宗悦が自宅で愛用したもの。ティーポットは日本の土瓶の形状を採用しており、日本家屋の室内で用いるのに相応しい姿を見せる。

チャイルズ・スクロールバック・アームチェア

イギリス 19世紀 日本民藝館蔵

1929年に柳宗悦と濱田庄司がイギリスから持ち帰ったウィンザーチェアのひとつ。テーブルと椅子を使う暮らしの伝統がない日本において、柳が優れた椅子として使用したのは、イギリスの椅子が中心であった。



第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝——美しいデザイン

柳宗悦は、陶磁、染織、木工などあらゆる工芸品のほか、絵画や家具調度など多岐にわたる品々を、日本のみならず朝鮮半島の各所、中国や欧米などへ旅し、収集を重ねました。時代も古くは縄文時代から、柳らが民藝運動を活発化させた昭和にいたるまでと幅広く、とりわけ同時代の、国内各地で作られた手仕事の日常品に着目し、それらを積極的に紹介しました。

第Ⅱ章では民藝の品々を「衣・食・住」に分類し、それぞれに民藝美を見出した柳の視点をひも解きます。

刺子稽古着(部分) 江戸時代 18-19世紀 日本民藝館蔵



Photo: Yuki Ogawa

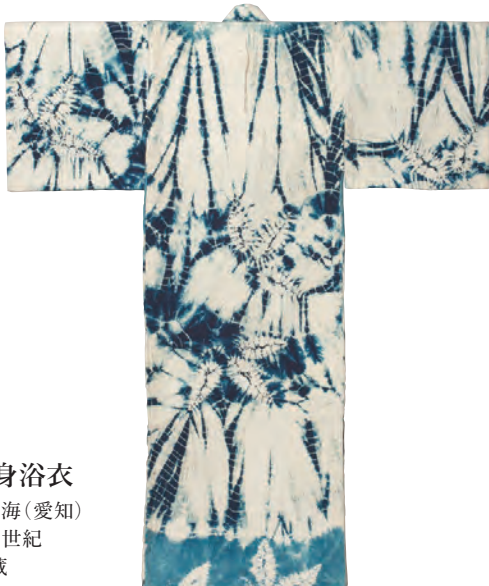
MIN
GEI

衣

Ⅱ——①「衣」を装う

“只被る為なら美しさ等どうでもいい。だが美しさは着たい気持ちをそそる。”

——柳宗悦「用と美」1941年



愛知
ゆかりの
品

蓑紋一ツ身浴衣

尾張有松・鳴海(愛知)
明治時代 19世紀
日本民藝館蔵

(上から)

流描指輪(2点)

河井寛次郎(細工:増田三男)
京都 1930-40年代

赤漆彫卍文帯留(右)

黒田辰秋 京都 1930年頃

銀象嵌赤漆花字帯留(左)

青田七良 京都 1930年頃

色絵五弁花模様帯留

富本憲吉(細工:増田三男)
東京 1931年

染付更紗模様帯留

富本憲吉(細工:増田三男)
東京 1931年

個人蔵



Photo: Yuki Ogawa

最初期の民藝運動に大きな影響を与えた高林兵衛の旧蔵品で、夫人や娘たちが愛用したものだという。

第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから

厚司(アットウシ)

アイヌ(北海道) 19世紀
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

アットウシは、オヒョウ、ハルニレなどの樹木の皮をはぎ、その繊維で織り出した樹皮布。模様は一見してアイヌと分かる強い個性を放っている。



波に鶴文夜着

江戸～明治時代 19世紀
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

夜着とは着物の形をした夜具のこと。躍動感あふれる鶴と波を描きながら、着物の形にぴったりと納め、藍の濃淡ですっきりと表現している。優れた意匠と熟練の技が噛み合った作品。

MIN GEI 食

Ⅱ——②「食」を彩る

“人間は美味を好む。だが料理だけに止めるのではない。
それを綺麗に皿に盛る。その皿さへも選擇する。”

——柳宗悦「用と美」1941年

網袋(鶏卵入れ)

朝鮮半島 20世紀初頭
日本民藝館蔵

藁編みの籠の中心に開いた窓から卵を入れるという、朝鮮の鶏卵入れ。上部の紐で吊るして、保管できるように作られている。



スリッウェア角皿

イギリス 18世紀後半-19世紀後半
日本民藝館蔵

現代でも人気が高いイギリスのスリッウェアも、民藝同人らが日本に広めたやきもののひとつ。本作は柳旧蔵のスリッウェアの優品で、数多く作られたパイ皿。

愛知
ゆかりの
品

呉須鉄絵撫子文石皿

瀬戸(愛知)
江戸時代 19世紀
日本民藝館蔵

第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから



Photo: Yuki Ogawa

住

桐文行燈 江戸時代後期 個人蔵

Ⅱ——③「住」を飾る

“暮らしは色々なものを招く。それに応じて適宜な材料が選ばれ、適当な形が整えられる。”

——柳宗悦「用と美」1941年

MINCEI

(左上から時計回りに)

手箒

仙台郡山(宮城) 1939年頃

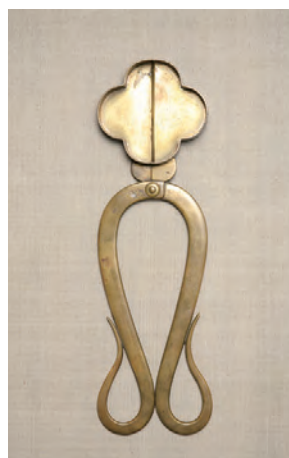
鹿沼箒

下野鹿沼(栃木) 1939年頃

手箒

信州(長野) 1939年頃

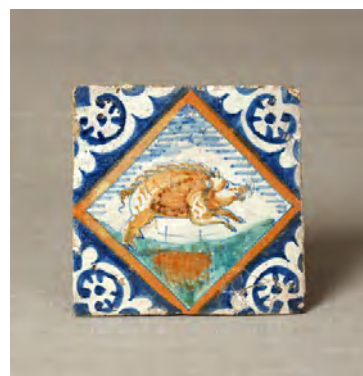
いずれも日本民藝館蔵



芯切鋏

京都 1920年代後半-1930年代前半
日本民藝館蔵

昭和戦前期の京都で作られていた、和蠟燭の芯を切るための仏具用鋏。切り取った芯が落ちないような造りや、握りやすさを考慮した柄など、機能性もよく考えられている。



色絵猪文タイル

オランダ 16-17世紀 日本民藝館蔵

円座

朝鮮半島 1930年代

日本民藝館蔵

柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司の3人は、1936年、1937年と2年連続で朝鮮を旅し、当時朝鮮で作られていた日用品を購入した。これは模様として文字が編み込まれた座布団代わりの敷物・円座。



椅子

オーストリア 19世紀初頭
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから

T O P I C

気候風土が育んだ暮らし——沖縄

本土から遠く離れた沖縄は、古い歴史を持ち、独自の文化、風習を育んできました。第Ⅱ章最後では、柳が「奇跡」と称えた沖縄の民藝に焦点をあて、紅型、織物、陶器、漆器などにより、かつての沖縄の豊かな暮らしを顧みます。



芭蕉布縞着物

沖縄 19-20世紀前半

静岡市立芹沢銈介美術館蔵



クバ団扇

沖縄 1950-60年代 日本民藝館蔵

流水に桜河骨文紅型着物

沖縄 19-20世紀前半

静岡市立芹沢銈介美術館蔵

紅型は、南国らしい色鮮やかな沖縄の模様染である。模様の多くは、日本本土からの影響が強いが、季節感がなく、四季の模様が自由に取り込まれているところに特徴がある。芹沢銈介は、沖縄の紅型に出会って夢中になり、染色家としての道を歩み始めた。



第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

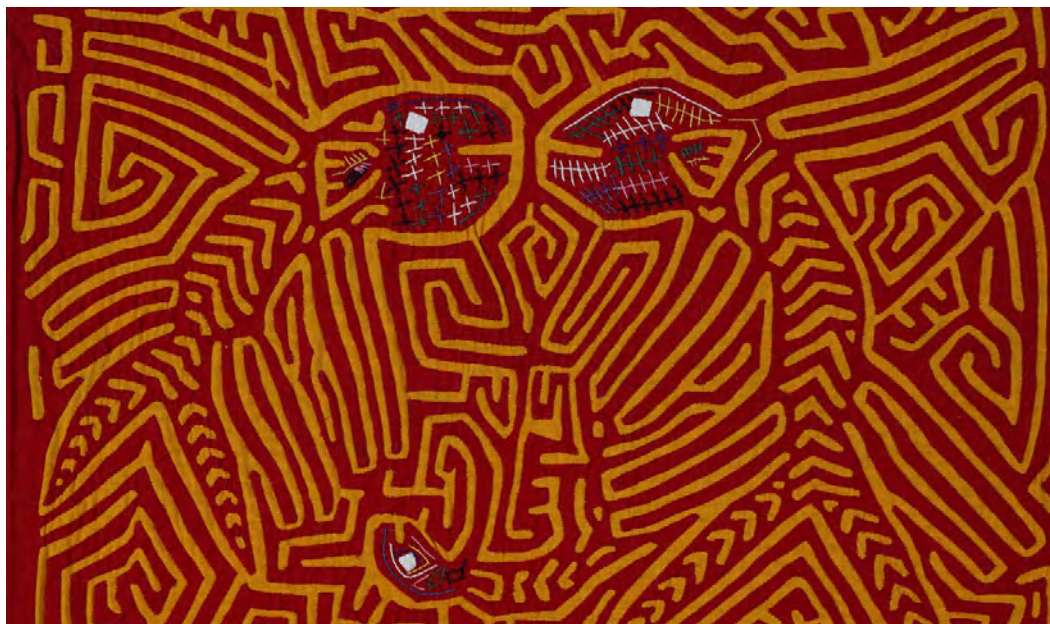
暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから



双魚文上着裂(モラ)(部分) サンブラス島(パナマ)
20世紀後半 静岡市芹沢銈介美術館蔵

第Ⅲ章

ひろがる民藝——これまでとこれから

柳宗悦の没後も民藝運動は広がりを見せました。濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介が1972(昭和47)年に刊行した書籍『世界の民芸』では、欧州各国、南米、アフリカなど世界各国の品々を紹介。各地の気候風土、生活に育まれたプリミティブなデザインは民藝の新たな扉を開きました。

一方、民藝運動により注目を集めた日本各地の工芸の産地でも、伝統を受け継いだ新たな製品、新しい世代の職人たちが誕生しています。本展では国内5つの産地から、これまでと現在作られている民藝の品々や、そこで働く人々の“いま”を紹介します。

そして、本章最後では、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Art ディレクター)の愛蔵品や、世界各地で見つけたフォークアートが“いま”の暮らしに融合した「これからの民藝スタイル」を、インスタレーション展示で提案します。

Ⅲ——①『世界の民芸』——新たな民藝の世界

[左から] 濱田庄司、芹沢銈介、
外村吉之介『世界の民芸』
朝日新聞社 1972年 個人蔵／
靴下 アゼルバイジャン地方
(イラン) 20世紀後半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵
人形 フニン県ワンカヨ(ペルー)
20世紀後半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵



Photo: Yuki Ogawa



第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる「民藝」

——これまでとこれから

Ⅲ——②民藝の産地 一作り手といま

昭和戦後期以降の日本のものづくりは機械での生産が主流となりますが、伝統を失わずに手仕事を続ける産地、失われた手わざの復活を試みる職人、新たな民藝を創作する人々が登場します。本展では5つの産地に焦点を当て、かつての品物と現代の製品、そこで働く人々のいまを紹介します。

小鹿田焼

おんたやき
大分県

江戸時代中期から続くやきものの里。川の水流の力で地元の土を搗き、地形を活かした登り窯で焼く。一子相伝の窯に伝わる、日常使いの器たち。



Photo: Yuki Ogawa

丹波布

たんばぬの
兵庫県

手紡ぎの糸を草木で染め、絹のつまみ糸を織り込む手織の布。江戸末期にはじまり一度は廃れるも戦後復興し、現代の作り手へと引き継がれる。

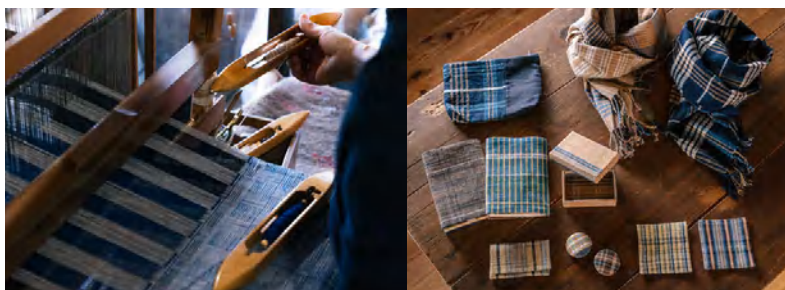


Photo: Yuki Ogawa

鳥越竹細工

とりこえたけざいく
岩手県

数多い産地のなかでも柳が好んだ、寒冷の地の細くしなやかな原料でつくる繊細な竹細工。一方で、現在は素材調達の危機という局面をむかえている。



Photo: Yuki Ogawa

八尾和紙

やつおわし
富山県

もとは薬売りの包み紙として発展した八尾和紙。現在、八尾で唯一和紙作りを続ける桂樹舎は、芹沢銈介の影響による色鮮やかな型染和紙に今も新しい試みを重ねる。



Photo: Yuki Ogawa

倉敷ガラス

くらしきからす
岡山県

ガラス職人の小谷眞三が、民藝運動の関係者らの勧めではじめた日常使いのぬくもり溢れるガラス器。現在は二代目の工房に引き継がれる。



Photo: Yuki Ogawa

第Ⅰ章

1941 生活展

——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章

暮らしのなかの民藝

——美しいデザイン

第Ⅲ章

ひろがる民藝

——これまでとこれから

T O P I C

Mixed MINGEI Style by MOGI

第Ⅲ章最後では、現在の民藝ブームを牽引する存在として活躍するテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Art ディレクター)による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションを展開します。



テリー・エリス／北村恵子
(MOGI Folk Art ディレクター)自邸



Photo: Yuki Ogawa

MOGI Folk Art

モギフォークアート

東京・高円寺でMOGI Folk Artを主宰するテリー・エリスと北村恵子は、セレクトショップBEAMSのバイヤーとして活躍していた1990年代から、民藝運動とも関わりの深い日本の手工芸品を、服飾や北欧インテリアと組み合わせて紹介してきました。2003年にBEAMS内のレーベル「fennica」を立ち上げ、2022年には自身のショップMOGI Folk Artを新たにオープン。現在に至るまで「デザインとクラフトの橋渡し」をテーマに、国内の産地を回って見出したトラディショナルな民藝・工芸の品々を現代の暮らしに取り入れることでもたらされる豊かさを提案しています。作り手との交流を通じて、伝統的な技法やモチーフを活かしたオリジナルの別注品も数多く生み出しています。



MOGI Folk Art ディレクターのテリー・エリスと北村恵子

Photo: Yuki Ogawa

MIN
GEI

展覧会公式サイト

<https://mingei-kurashi.exhibit.jp/>

展覧会公式SNS



アクセス

名古屋市美術館
Nagoya City Art Museum



〒460-0008 名古屋市中区栄 2-17-25〔芸術と科学の杜・白川公園内〕

TEL:052-212-0001 FAX:052-212-0005

<https://art-museum.city.nagoya.jp/>

- 地下鉄東山線・鶴舞線「伏見」下車、
5番出口から南へ徒歩8分
- 地下鉄鶴舞線「大須観音」下車、
2番出口から北へ徒歩7分
- 地下鉄名城線「矢場町」下車、
4番出口から西へ徒歩10分



お問合せ

展覧会のご案内：052-212-0001

報道関係者
お問合せ先

名古屋市美術館 担当：魚住

E-mail ncam_gakugei@kyoiku.city.nagoya.lg.jp

TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005

住所 〒460-0008 名古屋市中区栄2-17-25

「民藝 MINGEI－美は暮らしのなかにある」広報用画像の提供について

特別展「民藝 MINGEI－美は暮らしのなかにある」をご紹介いただく際の広報用画像を提供いたします。下記注意事項をご確認の上、専用フォームにより申請してください。

広報用画像提供依頼専用フォームはこちら
→<https://logoform.jp/form/mX9C/673365>



●展覧会をご紹介いただく場合

- ・本展をご紹介いただく場合、記事・番組内容について情報確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で校正を下記問い合わせ先までメールにてお送りください。お送りいただけない場合、掲載内容についての責任は当方では負いかねます。
- ・掲載・放送後は、掲載紙・誌、または同録データもしくはDVD等を1部お送りくださいますようお願いいたします。WEBサイトの場合は、掲載時にURLをお知らせください。

●画像掲載について

- ・画像の使用は本展を紹介する場合に限らせていただきます。展覧会終了後の放送・掲載はお断りします。また本展会期中であっても、再放送や転載をされる場合はご連絡ください。
- ・ご使用の際は、指定のキャプション表記をお願いいたします。
- ・画像はすべて全図で使用してください。トリミング、縦横比の変更、文字や他のイメージを重ねることはできません。
- ・以上の点にご留意いただけない場合、所有者などとの間にトラブルが生じることがあります。その場合、主催者側では一切責任を負いかねますのでご注意ください。
- ・画像は原則データでの送付とさせていただきます。必ずメールアドレスをご記載ください。

●読者プレゼントの提供について

- ・本展をご紹介いただく場合、ご希望があれば本展招待券を貴媒体読者プレゼント用に提供します(5組10名様まで)。専用フォームにてお申し込みください。

●展覧会の取材・撮影について

- ・本展の取材・撮影をご希望の場合は事前にご連絡ください。ご連絡がない場合、お断りすることがあります。

【広報に関するお問い合わせ】

名古屋市美術館（広報担当：魚住）

〒460-0008 名古屋市中区栄 2-17-25 TEL：052-212-0001 FAX：052-212-0005

メール：ncam_gakugei@kyoiku.city.nagoya.lg.jp

「民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある」 広報画像一覧

【会場：名古屋市美術館 会期：10月5日(土)～12月22日(日)】

1. 展覧会キービジュアル
縦／横



2. スリッウェア 鶏文鉢



3. 竹行李／刺子足袋



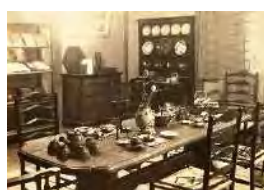
4. 緑黒釉掛分皿ほか



5. 角酒瓶／酒瓶／栓付瓶



6. 日本民藝館「生活展」
会場風景



7. チャイルズ・スクロール
バック・アームチェア



8. 呉須鉄絵撫子文石皿



9. 波に鶴文夜着



10. 厚司（アットゥシ）



11. 蓑紋一ツ身浴衣



12. 流水に桜河骨文紅型着物



13. スリッウェア 角皿



14. 網袋（鶏卵入れ）



15. 緑黒釉掛分皿
／ 蠟石製薬煎



16. 芯切鉢



17. 双魚文上着裂（モラ）



18. 小鹿田焼（大分）



19. 丹波布（兵庫）製作風景



20. MOGI Folk Artディレクター
のテリー・エリスと北村恵子



広報用画像使用の際は、以下のクレジットを必ずご掲載ください。

広報画像【ご掲載時に必要なクレジット表記】

1-1	展覧会キービジュアル（縦） ※クレジット不要
1-2	展覧会キービジュアル（横） ※クレジット不要
2	スリップウェア鶏文鉢 イギリス 18 世紀後半 日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa
3	（上から）竹行李 陸中鳥越（岩手） 1930年代／刺子足袋 羽前庄内（山形） 1940年頃 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa
4	（上から）緑黒釉掛分皿 因幡牛ノ戸（鳥取） 1931年頃／流描皿 河井寛次郎 京都 1927-28年頃／藍鉄絵紅茶器 濱田庄司 栃木 1935年頃／食器棚 イギリス 19世紀 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa
5	（左から）角酒瓶 小谷眞三 倉敷（岡山） 1979 年／酒瓶 小谷眞三 倉敷（岡山） 1985 年頃／栓付瓶 メキシコ 20 世紀中頃 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa
6	日本民藝館「生活展」会場写真 1941年
7	チャイルズ・スクロールバック・アームチェア イギリス 19 世紀 日本民藝館蔵
8	呉須鉄絵撫子文石皿 瀬戸（愛知）江戸時代 19世紀 日本民藝館蔵
9	波に鶴文夜着 江戸～明治時代 19世紀 静岡市立芹沢銈介美術館蔵
10	厚司（アットゥシ） アイヌ（北海道） 19 世紀 静岡市立芹沢銈介美術館蔵
11	蓑紋一ツ身浴衣 尾張有松・鳴海（愛知）明治時代 19世紀 日本民藝館蔵
12	流水に桜河骨文紅型着物 沖縄 19-20 世紀前半 静岡市立芹沢銈介美術館蔵
13	スリップウェア角皿 イギリス 18 世紀後半-19 世紀後半 日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa
14	網袋（鶏卵入れ） 朝鮮半島 20 世紀初頭 日本民藝館蔵
15	（左から）緑黒釉掛分皿 因幡牛ノ戸（鳥取） 1931年頃／蠟石製薬煎 朝鮮半島 朝鮮時代 19世紀 いずれも日本民藝館蔵 Photo: Yuki Ogawa
16	芯切鉢 京都 1920年代後半-1930年代前半 日本民藝館蔵
17	双魚文上着裂（モラ） サンブラス島（パナマ） 20 世紀後半 静岡市立芹沢銈介美術館蔵
18	小鹿田焼（大分、現代作：坂本工窯、坂本浩二窯） Photo: Yuki Ogawa
19	丹波布（兵庫、製作風景） Photo: Yuki Ogawa
20	MOGI Folk Art ディレクターのテリー・エリスと北村恵子 Photo: Yuki Ogawa

広報用画像提供依頼専用フォームはこちら
→<https://logoform.jp/form/mX9C/673365>



* 注意事項、その他詳細は「民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある」広報用画像の提供についてをご覧ください。

展覧会 紹介文例

【50－70字】

約100年前に思想家・柳宗悦が唱えた「民藝」。本展では美しい民藝の品々約150件を展示し、民藝のひろがり、今、これからを展望します。

【100字】

日々使う器や道具に美を見出し、素材や作り手に思いを寄せる。約100年前に思想家・柳宗悦が唱えた「民藝」の考えは、今も私たちの日常を心豊かなものにしてくれます。本展では美しい民藝の品々約150件を展示し、民藝のひろがり、今、これからを展望します。

【200字】

日々の暮らしで使われる器、衣類、道具などに美を見出し、素材や作り手に思いを寄せる。約100年前に思想家・柳宗悦が唱えた民衆的工芸「民藝」のコンセプトは、今も私たちの日常を心豊かなものにしてくれます。本展では美しい民藝の品々約150件を展示します。また、今に続く民藝の産地の作り手の仕事や、民藝を取り入れた現代のライフスタイルをインスタレーションによって紹介し、民藝のひろがり、今、そしてこれからを展望します。



左上から時計回りに：
 [左から] 角酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1979 年／酒瓶 小谷眞三 倉敷(岡山) 1985 年頃／栓付瓶
 メキシコ 20 世紀中頃 いずれも日本民藝館蔵、八尾和紙(富山)、[上から] 竹行李 陸中鳥越(岩手)
 1930 年代／刺子足袋 羽前庄内(山形) 1940 年頃 いずれも日本民藝館蔵、鳥越竹細工(岩手)
 Photo: Yuki Ogawa